

平成30年12月1日(土)午後1時30分

たげきたばたけし こんこくじあと
多気北畠氏遺跡第37次(金国寺跡第1次)
発掘調査現地説明会資料

事業名：多気北畠氏遺跡発掘調査 **調査原因**：学術調査
調査主体：津市教育委員会 **調査地**：津市美杉町下多気
調査面積：78㎡ **調査期間**：平成30年10月18日～12月5日（予定）
調査指導：多気北畠氏遺跡調査指導委員会
三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター

1. はじめに(資料①)

津市教育委員会では、平成8年度以降、多気北畠氏遺跡の調査を継続して実施しています。金国寺跡は、北畠具方(材親)の菩提寺と考えられている寺院で、平成28年度から地形測量調査を行っています。

今回の発掘調査は、金国寺跡のほぼ中央西側の平坦地部分とその北側にある上の段との境界の斜面に調査区を設けて、金国寺跡における遺構や遺物の分布状況を確認するため実施しました。

発掘調査は、多気北畠氏遺跡全体としては旧美杉村や三重県が行った調査を含めて通算で37回目にあたることから第37次調査、また金国寺跡としては初めての調査となり、第1次調査になります。

2. 現況(資料②)

金国寺跡の規模は、南北約150m、東西約130mで、南部の平坦地から北奥部までの高低差が約30mあります。現況は南側の平坦地が耕作地で、北側と谷の東側が山林です。南端から北奥までに6段ほどの平坦地があり、上下の平坦地を区画する段差部分には石材が点在しています。また、金国寺跡や周辺で見つかった中世から近世にかけての五輪塔や無縫塔などの石材が2か所（石造物群A・B）に集められています。

3. 基本層位(資料③・④)

調査地は現況山林ですが、昭和40年代頃までは耕作地として利用されていました。平坦地では、おおむね旧耕作土のほぼ直下において平坦な地山（淡黄色

砂質土層・明黄褐色土層)と黒褐色土を検出し、これらの上面で落込み7やピット1等の遺構を確認しました。北側斜面においては表層土直下にある灰褐色土以下で石積1を検出しました。

4. 発見された主な遺構(資料④～⑦)

- ・石積1 トレンチ1・2(1T・2T)調査区北端の斜面で検出された石積。残っている高さは約80～120cmで、石材の大きさは約40～50cm程度のものが中心ですが、基底部では約100cmのものもあります。この石積は、調査区の東の斜面に一部石材が露出しており、さらに調査区の西側へも続くと考えられます。石積の掘形からは16世紀代前半の遺物が少量出土しており、近世以前までさかのぼる可能性があります。
- ・石積2 北側斜面の裾に東西方向に延びる石積で、石材は約30cm前後の大きさのものが中心で、基底部には70cmを超える大型の石材も使用しています。石積1より後に造られたもので、近世以降のものであります。
- ・溝3 トレンチ1(1T)の石積1の基底部とその南側で検出された石列による幅約50cmの東西方向の溝です。
- ・落込み7 トレンチ2(2T)の石積1の南側で検出された落込みで、幅約2.5m、深さが約30～40cmあり、石積2が造られる前のものです。16世紀前半の土師器皿等が多く出土しました。
- ・ピット1 トレンチ3(3T)の東側、黒褐色土の上面で検出されました。直径約40cmで、埋土から中世前期の^{がき}瓦器の小片が出土しました。

5. 発見された主な遺物

遺物は整理箱に10箱出土しました。その大半は石積や落込みの埋土に含まれる土器です。多くが土師器と呼ばれる素焼きの皿で、16世紀前半のものが多く、これらは地元産のいわゆる南伊勢系土師器と呼ばれるものです。陶磁器類では、16世紀前半の瀬戸美濃産陶器の天目茶碗や播鉢、中国産の青磁碗などがあります。そのほか少量の鉄釘も出土しました。石積1と石積2の間からは18世紀代の瀬戸美濃産の陶器などがみられるほか、表土や遺物包含層からは近世以降、近現代の陶磁器も出土しました。

5. まとめ

今回の調査の結果確認された平坦面は、調査区の西側では地山を削り、東側では低くなっている部分に盛土によって造られており、16世紀前半以降に使用されていることが判りました。

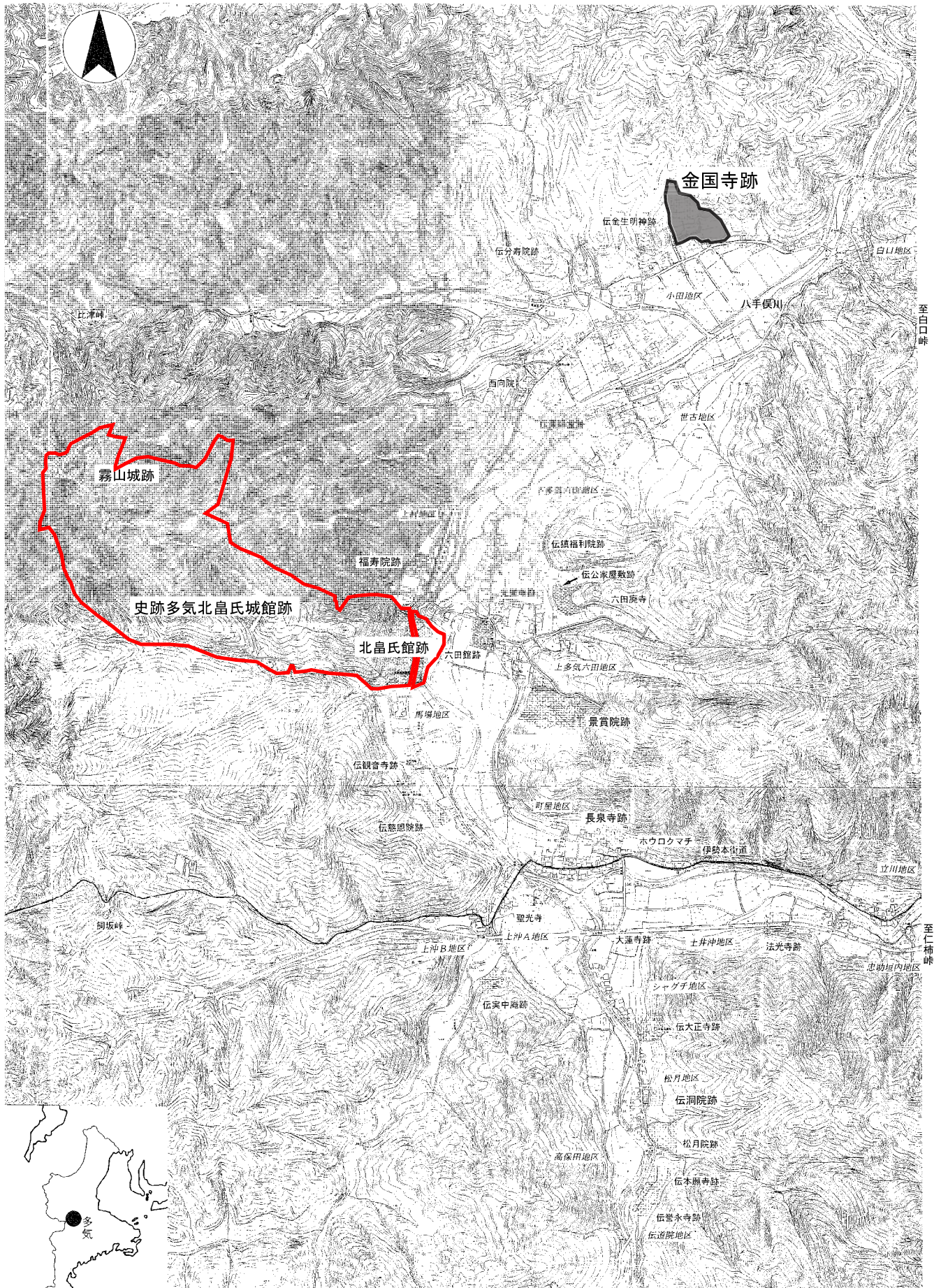
今回は、調査範囲が限られているため複数のピット等が検出されているものの、建物跡については確認できず、出土遺物も少ないことから存続時期も明確になりませんでした。

今回の調査地は、16世紀後半に北畠氏が滅亡した後も、上下の平坦面の境界の石積みなどに手を加え、耕作地、山林へと姿を変えていきますが、旧耕作土の直下では造成された平坦面が良好に残っていることが判りました。

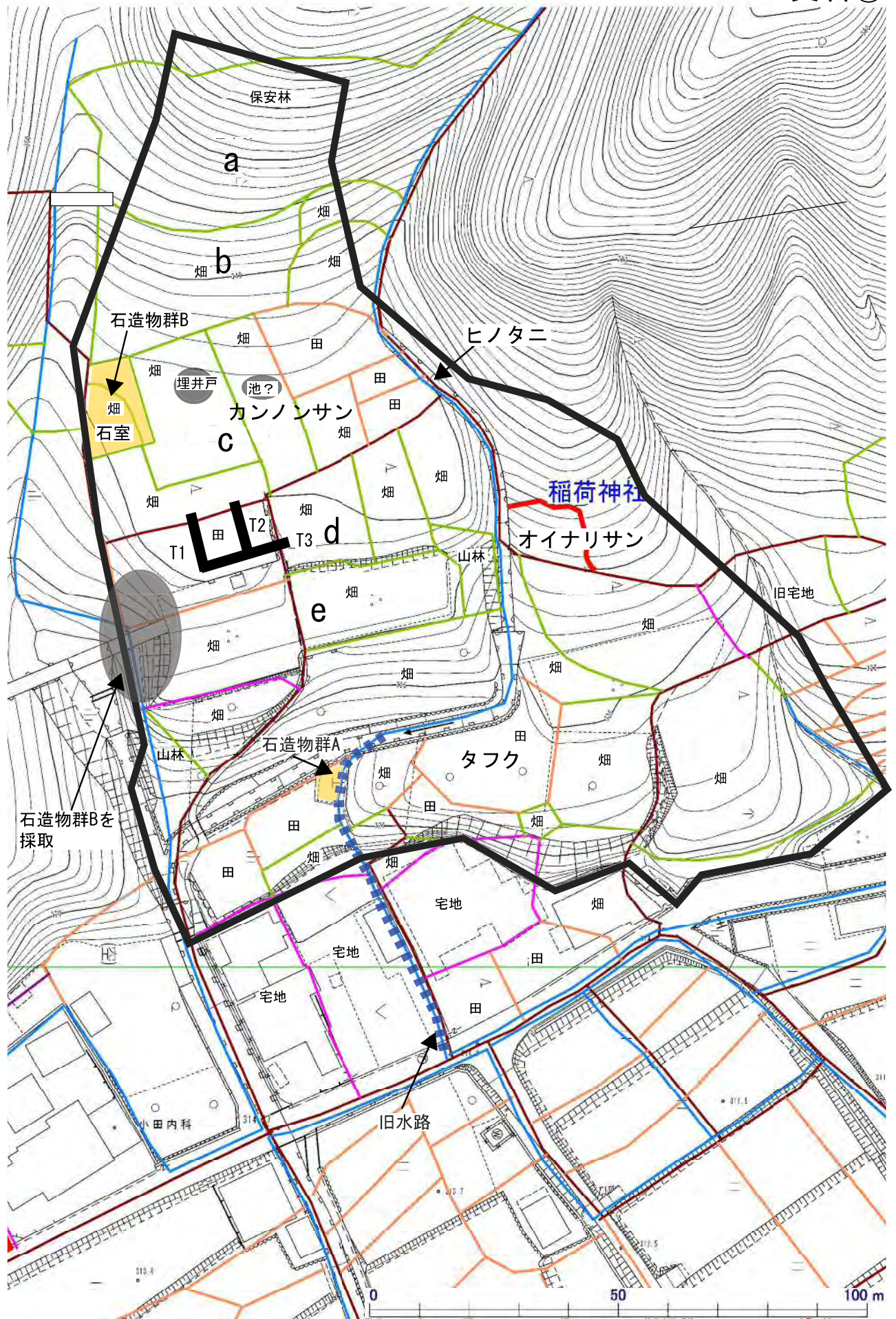
今後も金国寺跡の構造解明にむけて、調査を継続していく予定です。

【資料】

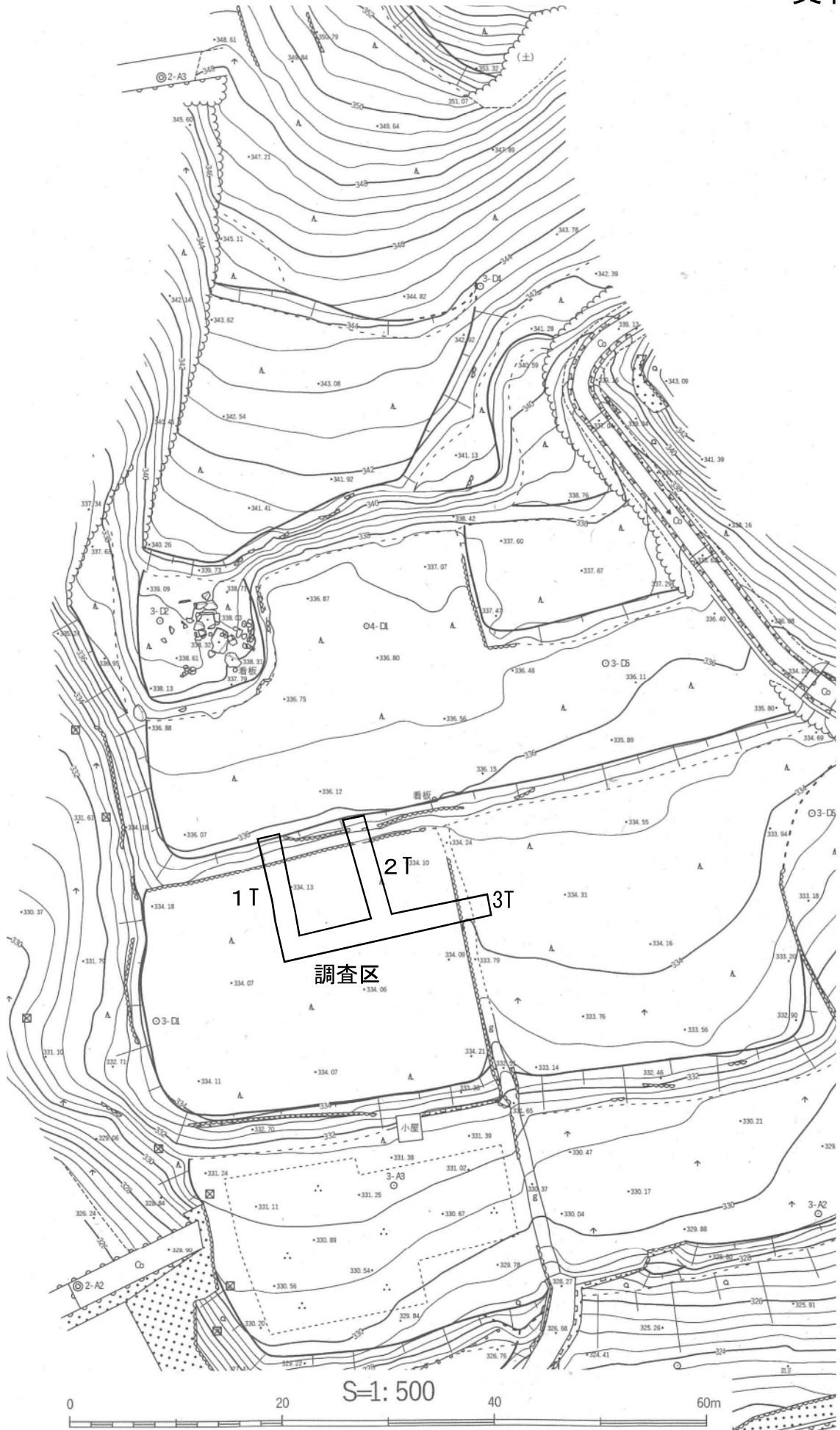
- ① 多気北畠氏遺跡(金国寺跡)位置図 (1:15,000)
- ② 多気北畠氏遺跡第37次(金国寺跡第1次)発掘調査区位置図 (1:1,000)
- ③ 多気北畠氏遺跡第37次(金国寺跡第1次)発掘調査区位置図 (1:500)
- ④ 多気北畠氏遺跡第37次(金国寺跡第1次)発掘調査 (1:100)
- ⑤～⑦ 調査区写真
- ⑧ 北畠氏・多気関連年表



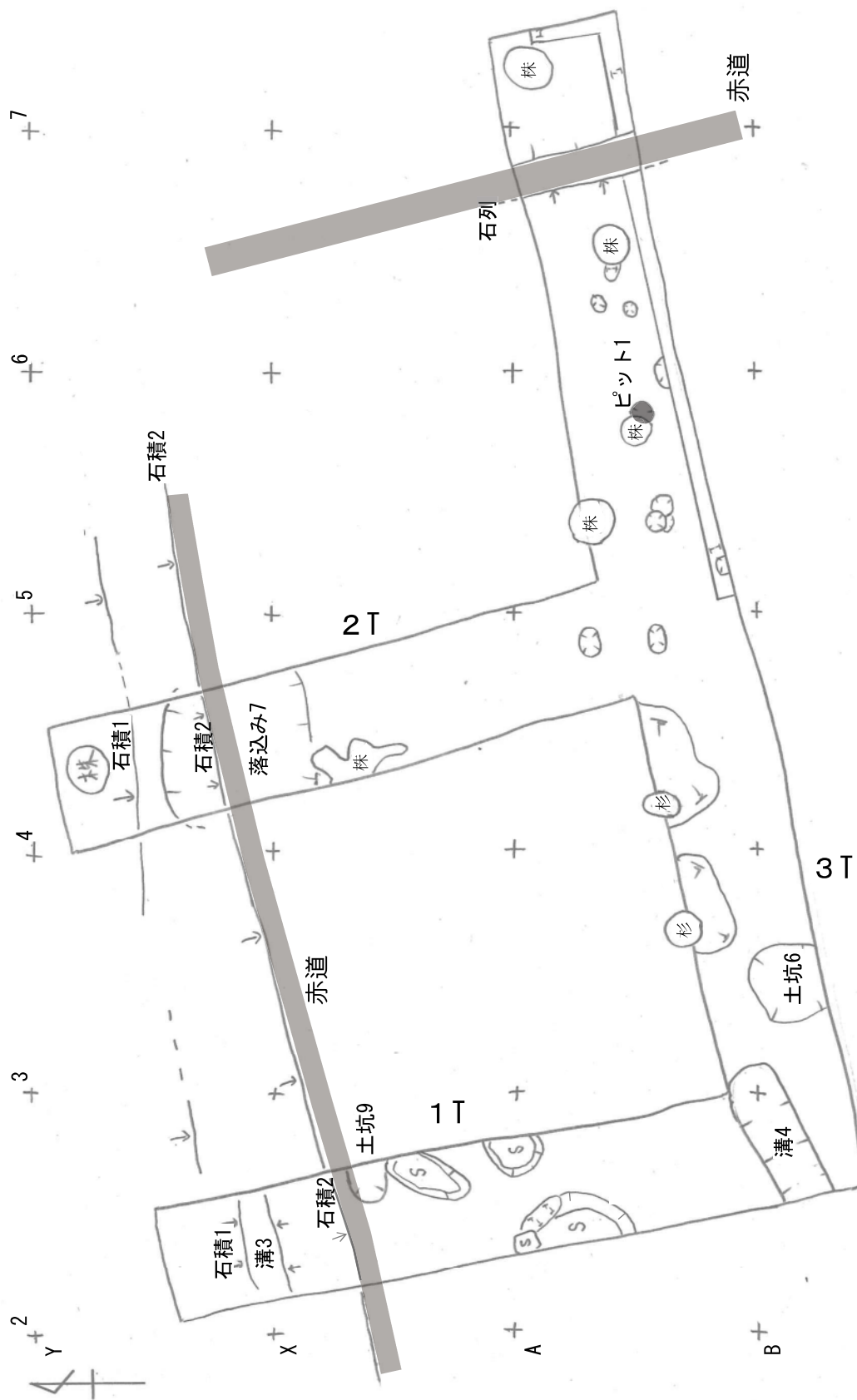
多氣北畠氏遺跡(金国寺跡)位置図(1:15,000)



多気北畠氏遺跡(金国寺跡)調査区位置図(1:1,000)



多氣北畠氏遺跡第37次(金国寺跡第1次)発掘調査区位置図(1:500)



多気第37次発掘調査略測図 (1:100)

資料⑤



霧山城跡・金国寺跡遠景 北東から



調査区全景 東から



1T 石積 1・2 南から

資料⑥



1T 石積1・2、溝3 東から



2T 石積1・2 南から



2T 石積2・落込み7 西から

資料⑦



3T 全景 西から



3T 土坑6 南西から



3T 東側 ピット検出状況 南西から

北畠氏・多気関連年表

西暦	元号	当主	出来事	発掘の成果
1336	延元元 建武3		北畠親房、伊勢入国。田丸城を拠点とする。	
1342	康永元	顕能	8月、田丸城落城。（『波多野貞夫氏所蔵文書』）	
1392	明德3		南北朝合一	
1403	応永10	顕泰	満雅への家督譲渡はこの頃と考えられる。（『醍醐寺文書』）	
1415	応永22	満雅	北畠満雅、幕府に対して挙兵。幕府軍の勝利に終わり、満雅は幕府と和議。（『満濟准后日記』）	
1428	正長元		後亀山天皇の孫小倉宮、伊勢国に出奔。「国司在所多気」の奥、「興津」に入る。（『満濟准后日記』） 満雅再び挙兵。（『満濟准后日記』） 12月に戦死する。（『師郷記』等）	
1430	永享2	顕雅	満雅の弟顕雅、満濟、赤松満祐の仲介により将軍足利義教と対面。（『満濟准后日記』）	
		教具	教具、叔父顕雅より家督を継ぐ。（『満濟准后日記』『建内記』）	
1441	嘉吉元		赤松満祐、将軍足利義教を殺害（嘉吉の乱）。赤松氏滅亡、満祐の子教康は伊勢国司を頼るが、これを匿わず、誅殺する。（『建内記』）	↑ 北畠氏館跡前期 石垣SA25・28、入口跡を造営
1453	享徳2		この頃、本格的な神三郡支配に乗り出す。（『氏経卿引付』）	↓
1467	応仁元		応仁の乱。将軍足利義政の弟義視、応仁の乱時に伊勢に下向、小倭の常光寺で国司教具と対面。（『応仁記』）	
1471	文明3	政勝	北畠政勝、父教具の死去により家督を継ぐ。（『内宮引付』『大乘院寺社雑事記』など）	
1480	文明12		北伊勢で長野氏と合戦するが、大敗。（『大乘院寺社雑事記』『氏経神事記』）	
1497	明応6	具方	木造政宗が北畠帥茂（具方の異母弟）と結び反乱。（『大乘院寺社雑事記』『大乘院日記目録』）	
1499	明応8		北畠氏の多気館ことごとく焼失する。（『大乘院寺社雑事記』）	北畠氏館跡後期整地この後か 六田館跡初期の整地
1500	明応9		多気館再建。（『大乘院寺社雑事記』）	北畠氏館跡後期
1517	永正14	晴具	父具方の死により国司家を継ぐ。 北畠氏館跡庭園は、この頃造られたと伝えられる。	↓
1537	天文6	具教	この頃具教家督を継ぐ。この頃領域を拡大するが、永禄に入り、領域内志摩、宇陀での軍事的緊張高まる。（『澤氏古文書』など）	↑ 上多気六田地区4・5次
1562	永禄5	具房	この頃北畠具房家督を継ぐ。（『浄眼寺文書』）	↓
1569	永禄12	（信具 雄豊）	織田信長南伊勢に侵攻、天花寺城・阿坂城・大河内城にて北畠具教と戦う。信長の次男茶筌丸（北畠具豊、信雄）を北畠氏の養子とし、和睦。（『信長公記』『多聞院日記』）	
1576	天正4		具教、信長により殺害され、北畠氏滅亡。多気も滅亡か。（『公卿補任』『勢州軍記』など）	